

王の資質 vol.1

# 変態熟女に犯されたのでお返ししよう

立ち読み版

夜のするめ烏賊

「コーヒーよ」

「あ、ええ、すみません」

なぜか謝ってしまい、美奈がフッフと笑いながらキッチンへ消えていった。

(これってもしかして、誘われてる?)

ノーブラは、百歩譲って、家にいる時の普段着として考えられる。しかし、美奈の笑顔には別のものが含まれている気がする。

と、直幸は自分の股間がばっちり勃起している事に気がついた。

「おわ！」

「どうしたの？」

「いいえ！？ 違いますよ！？」

驚いて声をあげた時には、すでに美奈が後ろにいた。慌てて否定を試みたが、美奈は「何がよ？」と至極まっとうな疑問を口にした。

とりあえず誤魔化そう。パソコンの画面を指さし「いや、ちよつと手順を間違っちゃったみたいで」と笑った。

「ふうくん……どうなったの？」

美奈が後ろから身を乗り出してきた。椅子に座っている直幸の後頭部に、セーター越しの巨乳がむにと当たった。

「！！」

「よくわかんないわね、どうなってるの？」

後ろから両手を出して、キーボードをでたらめにたたき始める。ちょうど直幸の頭を両腕で挟む格好で、手を動かす度に、胸が後頭部をなで回す。

青い画面に反射した美奈の顔は、発情した雌のものになっていた。

「お、おばさん。胸が……」

「ん？ 胸が？」

「胸が……」

「どうしたのかな？」

美奈は両腕を締め付けて、胸を押し当てるようにしてきた。ブラジャーの堅さはまったく感じられず、弾力とぬくもりが心地よく責めてくる。

「当たってます……」

「あら大変」

と、美奈は直幸の顔の横に、自分の口元を寄せ、囁いた。

「さつきまでオナニーしてた高校生に、おっぱいを押しつけたらどうなるのかしら？」

「!!!」

ばれていた。なぜばれたのか、どうなるのか、直幸の呼吸が一気に加速した。その様子を美奈は、興奮していると取ったようだった。すつと手が伸び、緊張で萎縮しかけていた股間をズボン越しになで回した。

「ドアを開けた時から、妙な臭いがしてたのよ。私の手にまで臭いがうつっちゃったじゃない。そのうえおっぱいを盗み見して、チンポガチガチにしちゃって、それ見てようやく思い出したわ」

そう言って、美奈は股間をなでていた右手を自分の鼻先に持って行くと、すうつと深呼吸した。

「あああ、これよ、この臭い。くっさいチンポ臭。高校生がオナニーをガマンすると、こんなに濃く臭うのね。キミが悪いのよ、こんなにバキバキにして、おばさんを誘惑するんだから」

美奈は直幸のベルトを外した。直幸の方は、現実離れの淫語を連呼する女性を目の当たりにして、混乱以上に、自分の勃起が今までにないほどズボンを押し上げていくのを実感していた。

思わず向き直り、美奈の胸をセーターの上から揉みしだいた。

「あんっ♪」

「おばさんこそ、こんな大きい胸を見せてつけて、どういうつもりだよ」

「そんなことしてないわ。見せつけるっていうのは――」

体を離し、おもむろにセーターの首元を引っ張り下ろした。胸が飛び出すように、直幸の眼前に現れる。

「――見せつけるっていうのは、こういうことよ。ほら、どうかしら？」

乳首を直幸の鼻先に晒し、ふるふると揺らせる。触れるか触れないかという微妙なところにいる二つの乳首に、直幸は思わず舌を伸ばした。舌先が触れる瞬間、美奈は体を引いた。

「あら、食べたいの？」

こくこくとうなずくと、美奈はまるで母親のような笑顔を見せ、それから淫乱な娼婦のような眼で言った。

「おちんぽを出して。まず私にくさあいちんぽを食べさせてちょうだい」

舌なめずりをするようにしながら、直幸の腰の間に顔を寄せると、口を○の字に開いた。直幸は震える手でズボンをずらし、パンツに指をかけ、戸惑ったが、意を決して下ろした。ぶる

んと性器が飛び出すと、美奈は口を〇の字にしたまま嬌声を上げた。

「あああ♪ しゅごいにおい…、ねえ、美奈のおクチにつつこんで、のどの奥までちんぽ臭でいっぱいにして…：んぶう！」

言われるままに、直幸は性器を美奈の口に差し込んだ。なめらかな頬の内側と舌の上を滑っていき、背筋が震えるような快感。思わず美奈の頭を押さえ、腰ごと動かすと、ぶちゅぶちゅと涎が口の端からあふれていく。

「んぶつ！ん！んん！ちゅ！ちゅ！ちゅる！なおゆきくん…：んつぶう！おいひいわ！」

美奈は直幸の腰に手を添えた。自ら頭を振り、大量の涎を流しながらペニスに吸い付いてくる。

「んん！ちゅぶつ！おごつ！すごい臭い、あたまがくらくらするわ…：。ん…：ぶじゅつ！ちゅつぶちゅつぶちゅつぶちゅつぶ！」

深いストロークで直幸のペニスを絞り上げる。口内の生暖かさがいやらしい。自分の手でするのは別のジャンルの快感。なにより、美奈の変態くさい性欲に圧倒されつつあった。

「ちゅつぶちゅつぶちゅつぶちゅつぶ！ん…、ぐじゅぐじゅつ、じゅつ、ちゅる…：、ぷはっ！はあ、見てえ」

規則的な動きから一転、舌先でカリ首をさんざんいじると、美奈は口を開けて見せつけてきた。涎でぶくぶくに泡だった口内があまりにも下品すぎるが、なぜか直幸のペニスはビクビクとさらなる快楽を求めて震えた。

「うふ…：ぐちゅぐちゅぐちゅつ、ごく…：…」

舌先でこそぎ取った汚れを味わうように、美奈は口の中で唾液をもてあそぶと、美味しそうに飲み込んだ。

「もつとしたい？」

「もちろん…：ち！」

「はい、どうぞ♪ あくくん」

美奈は口を開け、舌を伸ばして待った。陰茎を美奈の舌にぴたりと乗せ、そのままゆつくりと押し込んでいく。

「あくくん、はぶうつ、んぶつ、じゅぶつ、ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！ぢゅつぷ！」

先ほどよりもさらに深く、頭を振って直幸のペニスをしゃぶりつくす。時折苦しそうな顔を見せるが、美奈の眼はちらちらと直幸の、おそらくはだらしなく悦楽に支配されている表情を

楽しんでるようだった。

「おばさん！もうっ……！」

もっともっと美奈の口内を楽しみたかったが、初めてのフェラチオに長く耐えられそうにはなかった。

「ん！いいわよ！せーえきだして！つぢゅ！」

「あああ！」

がくがくと腰が震え、目の前がちらちらと点滅した。放尿するように長い射精感。最初は受け入れていた美奈も、途中から悲鳴を上げた。

「んんん！？なにこえ！？とめっ！んごお！！！」

拒否されても、頭は押さえつけたまま、大量の精液を流し込んだ。

「んぐおおお！」

あふれ出した精液が、美奈の胸の上にびたびたと散った。放出しきったペニスを引き抜き、肩で息をする。美奈は涙目になりながらも、口に残ったものを飲み込むと、呆れたように笑った。

「出し過ぎよ。それとも、高校生ってこれが普通なの？ああ、のどの奥までべつとりして…

…はまっちゃいそう。ふふつ、でも残念ね。おっぱいがキミの臭いで汚れちゃったわ」  
美奈は胸に散った精液を指でのばし、全体に塗りつけると、むにと持ち上げた。

「ほくら、これでも舐めたい？」

直幸は一瞬困ったが、それでも美奈自信の指先が胸の上で踊る様は、それだけで扇情的だった。

「…：はい」

「あらら」

今度は美奈が困った顔をして立ち上がり、「シャワーを浴びてからね」と直幸の手を引いた。

先に美奈がシャワーを浴びた。その間、彼女の寝室で待っているように言われた直幸だったが、美奈の香りで包まれている部屋で待っている間、色々と妄想しすぎて、すっかり股間が元気を取り戻していた。

「おまたせく…：…つて」

王の資質 vol.1

# 変態熟女に犯されたのでお返ししよう

2012年2月上旬発売予定

夜のするめ烏賊

